海の
ほとり
美術館

Press Release

２０２２年４月２０日
海のほとり美術館実行委員会
逗子アートフェスティバル実行委員会

2018 年から延べ約 3,000 名のボランティアと共に制作した連作「ぼくたちのうたがきこえますか」最終章

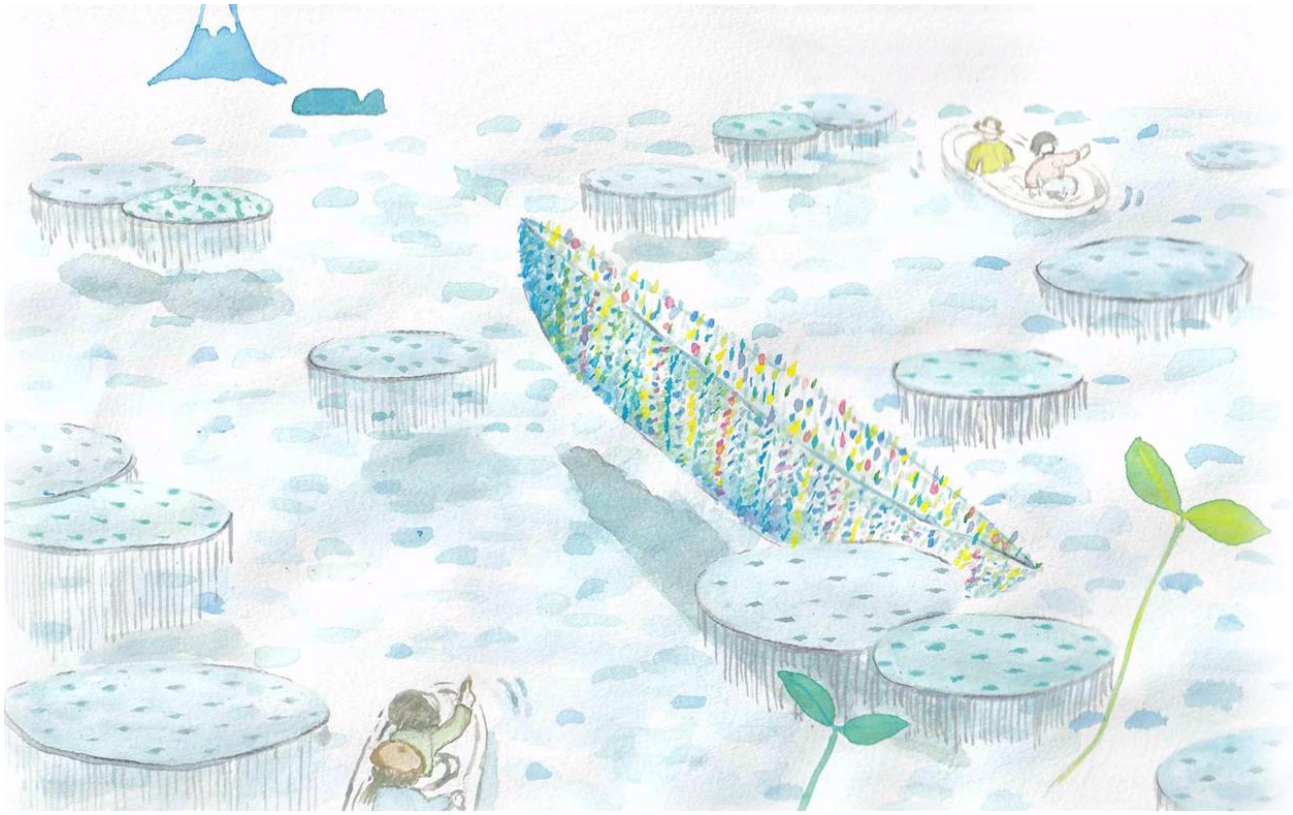
５月「海のほとり美術館」、海が見える市営プールにて展示スタート

～逗子アートフェスティバル（ZAF（ザフ））2022 プレ企画～

「海のほとり美術館」は、逗子市内在住のアーティスト松澤有子が 2018 年からスタートし、これまでに延べ約 3,000 名ものボランティアと共同で制作を続けてきたアート作品「ぼくたちのうたがきこえますか」の集大成となる大型インスタレーション作品です。

作品は、主にプラスチック製の「糸」により制作されています。それは、逗子海岸に漂着したプラスチック片や、市民から集められたペットボトルのキャップなどを熱で溶かし、糸に変え作品の原料として活用しています。

観覧者はプールのへりから、あるいはプールに浮かべられたビニールボートに乗り込み、水面を流れながら作品を鑑賞します。その視線の向こうには、富士山を背景にした雄大な相模湾を臨むことができます。生活に身近なプラスチックと地元の大切な地域資源である美しい海との関係がアート作品を媒介に混じり合う、唯一無二の鑑賞体験となることでしょう。



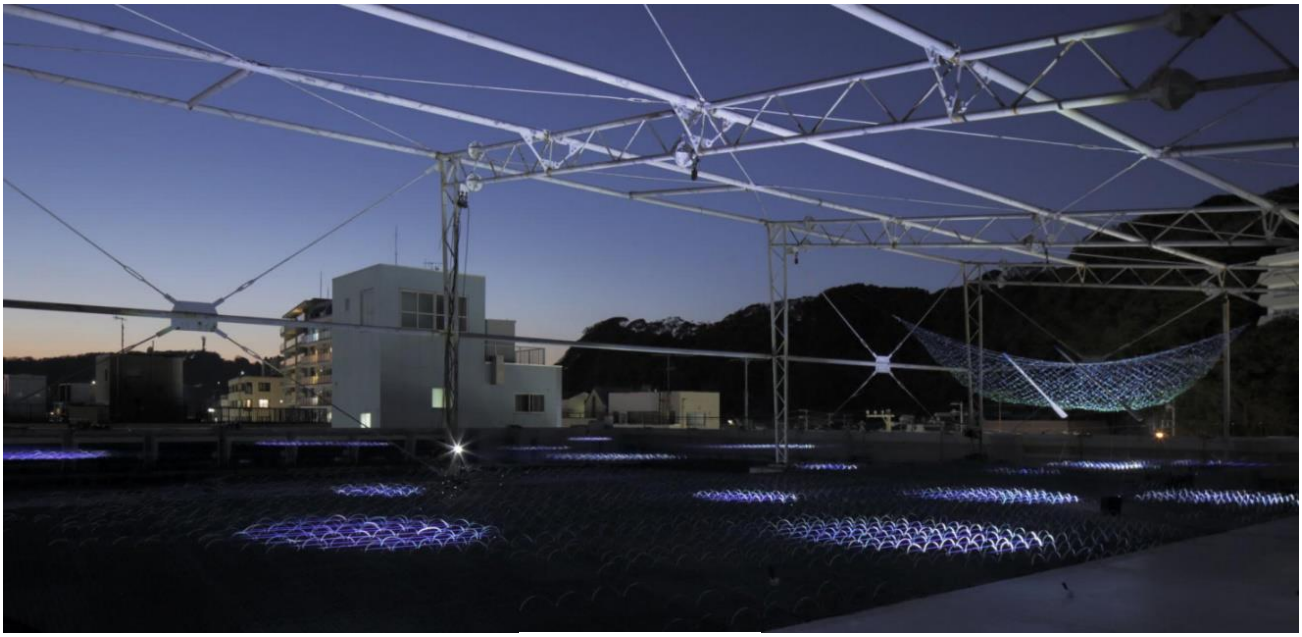
アーティストによる展示イメージのイラストレーション

海の
ほとり
美術館

Press Release

▪ 25m プールに設置される大型インスタレーション作品

「ぼくたちのうたがきこえますか」は、2018 年、逗子市と市民による年 1 回のアートフェスティバル「逗子アートフェスティバル」（以下、ZAF）の参加作品として発表されました。逗子駅前に位置するビルの屋上を会場に姿を現した 7 m にも及ぶ舟は、海に漂着した小さなプラスチック片を素材に制作。作品はその舟を中心に、屋上全体に展開されました。また、作品を舞台にダンサーChii 演出による、ダンス＆生演奏のパフォーマンスが公演されました。展示終了後、市民とのワークショップ（以下、WS）が開催され、舟は解体、小さな作品として参加者の元に散らばっていきました。



2018 年展示の様子

2019 年、作品は奥行き 30m もの屋内空間で展示。海とも空とも曖昧な空間に、新たに制作された舟とプラスチックのカケラたちが共に漕ぎ出して行きました。幻想的な空間の中で、Chii などアーティストによるパフォーマンスも実施。

2020 年、会場は逗子市の文化拠点である逗子文化プラザホールとなります。
吹き抜けの明るい空間の中、ペットボトルのキャップから紡いだ糸を原料にボランティアたちが制作した大勢の個性的な「おばけ」が、2019 年に制作した舟と共に自由に空間を舞いました。

2019 年展示の様子

2020 年展示の様子

2021 年、「ぼくたちのうたがきこえますか」の最終回として市営プールにて展示する作品制作を行なっていたものの、新型コロナウイルス感染症の影響により、展示はやむなく中止に。しかしながら、その間もワークショップや公開制作により松澤とボランティアによる作品制作は続けられました。

そして、2022 年 5 月、1 年のブランクを経てついに作品に託された物語は最終章となります。
逗子の市民にとって、子どもの頃から通い、夏の思い出となっている海のほとりにある市営プール。このプールを舞台に、25m プールの中に巨大なインスタレーションを展示します。普段見慣れた風景が変化し、16 日間のモニュメントとして記憶してもらいたい。そして、その言葉だけでない体験を、逗子のことや、私たち人間の生活を暖かく包んでくれている海について、心のどこかに残しておいてほしいと願っています。

▪ 延べ約 3,000 名　市民中心のボランティアと共に作る作品

「ぼくたちのうたがきこえますか」の制作は、2018 年から公開され、2022 年までに延べ約 3,000 名ものボランティアが参加してきました。逗子海岸での漂着プラスチック拾い、公開制作でのサポート、ワークショップの参加や運営など、関わり方は様々です。逗子市民を中心に、神奈川県内各所・都内など市外からも、親子連れ・高校生・大学生・ご高齢の方など、世代を問わず多くの方々にご参加いただいています。

同じ空間でひとつの作品を制作することで、日常生活では交わる機会の少ない人々同士のコミュニケーションが生まれ、作品の完成に向けて一体感が生まれています。

公開制作での制作サポート

イベントでの WS

「海のほとり美術館」では、小坪港のかんす丸や正旗丸、竹林の整備・管理をする三浦竹友の会など、地域に根差した活動をするプロフェッショナルのご協力も得ながら作品制作を行なっています。
逗子市立の小学校の先生のご協力もあり、全ての学校の児童にペットボトルのキャップ集めにご協力いただいています。
集まった素材は、全て作品制作に活用されます。
作家のみならず、多くの人の力を借りて、5 月に作品は披露されます。

海岸で漂着プラスチックを拾う

展示場所のプールでの WS

▪ 作品を通して、海と私たちの生活のサステナビリティ（持続可能性）に目を向ける

「ぼくたちのうたがきこえますか」の素材には、主にプラスチックが使用されています。
それは、展示場所であり松澤の生まれ育った地でもある逗子の海岸で拾われた海洋プラスチックや、逗子市立小学校、制作ボランティアから集められたペットボトルのキャップ、廃棄予定のクリアファイルなどです。

海岸で拾った漂着プラスチック

ペットボトルキャップを粉砕し「糸」の原料とする

そもそも、「廃棄されるプラスチックで作るアート作品」は、松澤が自分の子どもと逗子海岸を散歩中に、小さなプラスチックの破片を拾った子どもに「宝石見つけたよ！」と何気ない一言をかけられたことから着想を得たものでした。

今、プラスチックは地球環境と社会の持続性を脅かす環境問題のひとつとして扱われています。
不完全なプラスチックの廃棄により海洋プラスチック問題が深刻化しており、学校の授業でも取り上げられるほどです。
しかし、プラスチックは私たちの生活を支える大切な素材のひとつであり、人の扱い方で評価が変わることもあります。子どもがプラスチック破片を「宝石」と言ったように一方的に「悪者」にするのではなく、新しい付き合い方をひとりひとりが考えることが大切なのかもしれません。廃プラをアート作品に昇華させる試みにおける制作サポートや、作品の鑑賞を通じて、一人ひとりがプラスチックや生活との関係について一歩立ち止まって考えるきっかけになることでしょう。

海の
ほとり
美術館

Press Release

作品制作の過程でも、廃棄物を出来るだけ少なくし、終了後はプラスチックを家具素材に再利用するなどの再活用をしていきます。作品を通じて、地域の大切な自然資源である海の状況を考える、そんな一面も作品の魅力のひとつとかもしれません。

作品の材料になるキャップからできた「糸」

キャップを溶かす機材から糸を紡ぐ様子

漂着プラスチックから作られた「いきもの」

小学校から集まったペットボトルキャップ

イベントでの WS もボランティア主導で

会場となる小坪飯島プール

海の
ほとり
美術館

Press Release

【アーティストプロフィール】

松澤有子（まつざわ ゆうこ）

1975 年神奈川県逗子市生まれ、逗子市在住。2007 年シドニー大学大学院美術学部卒業。オーストラリアでアーティスとしてのキャリアをスタートし、9 年間の活動を経て日本に帰国。日本での主な展示は「大地の芸術祭（2009）」「黄金町バザール（2011）」「静岡市美術館（2014）」など。2 児の母。
https://www.yukomatsuzawa.info/

私の作品は視覚的な詩です。
制作は、その空間、そこに存在する時間や記憶に寄り添うことからはじまります。
自然の一部としての人間、自らが自然的存在であることに身を投じたときに立ちあらわれる個の不完全性、不確実性、私は、あなたでもあり、時間でも森の落ち葉の存在でもある。そういう境界線のあいまいさに実に興味があります。また、万物は流転します。その中で私の作品は、流れゆくあいまいな境界線のその先をさらに紡いでゆこうとする過程の積極的な残像です。

【開催概要】

会　　期　：2022 年（令和 4 年）5 月 21 日（土）～6 月 5 日（日）
場　　所　：小坪飯島公園プール（神奈川県逗子市小坪 5 丁目 24 番 9 号）
観 覧 料　：５００円（中学生以下無料）
主　　催　：海のほとり美術館実行委員会、逗子アートフェスティバル実行委員会
共　　催　：逗子市、逗子市教育委員会
企画運営　：逗子アートネットワーク（アーティスト　松澤有子、企画　長峰宏治）
協　　賛　：菊池地所株式会社、CAMWACCA
ホームページ：https://bokuuta2022.localinfo.jp

★オープニングのスペシャルパフォーマンスやワークショップなど、展示期間中は様々なイベントを企画しています。
詳細が決まり次第、プレスリリースや HP、Facebook でお知らせする予定です。（５月中旬頃を予定）

【問い合わせ先】
海のほとり美術館実行委員会　プレス担当・児玉　bokuuta2022@gmail.com

以上